

# ビジネスとしての手芸 —女性による女性のための手芸専門店「キルトショップ」

坂田 博美 富山大学教授



2013年の「第13回東京国際キルトフェスティバル—布と針と糸の祭典—」のフアンポイントレッスンにて、キルトショップ・オーナーが作品紹介。作品に合わせたファッションにも注目

手芸の中でも、とくに人気を集めるパッチワークキルト。その人気を支えるのは、キルター（キルト愛好家）やキルトショップ・オーナーを取り巻く手芸ビジネスにあるようだ。

でキルトを習ったこともある。

一九七〇年代に日本に伝わったパッチワークキルト  
一九九七年、手芸店主へのインタビューから、手芸のフィールドワークが始まった。いろいろな手芸の展示会で作品を鑑賞してきた。二〇〇三年からは、パッチワークキルト（以下、「キルト」と略）を中心に、日本やアメリカの展示会でフィールドワークを進めている。研究のため、一時期、教室

でキルトを習ったことでもある。一九七〇年代にアメリカから日本に伝わったキルトは、近年日本で、もつとも人口が多いと言われる手芸である。布と布を接ぎ合わせ、表布を作る。表布と裏布の間にキルト用の綿をはさみ、キルティングを施す。布と布を接ぎ合わせるピースワークの楽しさ、キルティングによりあらたな表情を見せる面白さが、キルトの魅力である。小さな布を接ぎ合せて、ベッドカバーサイズの作品に仕上げるのは長期にわたるため、達成感も大きい。

しかし、キルトが伝わったばかりの頃は、今日のようにキルト用の布や道具を扱う専門店がなかった。キルト展示会のトークショーでは、キルト用の布や道具がなく、苦労したエピソードが語られることもあった。

パッチワークキルトに魅せられた女性とキルトショップの登場  
日本で「キルトショップ」と名付けられた専門店が開店したのは、一九七六年である。キルトショップとは、キルトの専門店として、キルトショップ・オーナー（以下、「オーナー」と略）が経営する自宅ショップを指す。キルト教室の生徒から求められ、キルト教室主宰者自らが、オーナーとなることもあった。

一九八〇年代には、キルト専門誌が、定期的に発刊されるようになった。一九八六年に創刊した『キルトジャパン』（日本ヴォーグ社）は、現在も、年四回発刊されている雑誌である。

これまで多くのキルト展示会が、開催されてきた。例えば、二〇一六年一月二日〜二七日に東京ドームで開催された「東京国際キルトフェスティバル—布と針と糸の祭典—」は、今年で二五年目を迎えた。

キルト展示会には、多くのキルトショップが出店する。キルター（キルト愛好家）にとって、作品を鑑賞することと同じくら

い、キルトショップでのお買い物を楽しみなのだ。招待作家として、作品を出展するオーナーも多く、ワークショップの講師として国内外で活躍するオーナーもいる。

このように、出版社が発刊する雑誌や本、出版社を中心とした主催者による展示会が、キルトブームを作ってきた。日本は、アメリカの次にキルト人口が多いと言われるほどで、アメリカのキルト展示会でも、日本のキルトは、高く評価されている。

フィールドワークを通じてわかってきたのは、キルトを広めるのに「役買ったのが、キルトをしている人たち、とくに「キルト教室を主宰するキルトショップ」のオーナーだということである。

すべての都道府県に専門店があるのはパッチワークキルトだけ

キルト用品を扱う店舗は、さまざまである。中でも、「キルト教室を主宰するキルトショップ」は、多いと思われる。国内外の布が、オーナーによって収集され、個性的な品揃えとなっている。そうした品揃えによりファンとなったキルターが、教室の生徒、つまり、キルトショップの顧客となっていく。生徒の中には、従業員としてキルトショップで働くことになった人も少なくない。

こうして、「キルト教室を主宰するキルト



キルト展示会（第22回インターナショナル・キルトウィーク横浜2014）に出店中のキルトショップ。左の女性がキルトショップ・オーナー。ショップごとに個性的な品揃え

ショップ」において、教室を主宰することで、顧客が生徒中心であっても、経営を維持できているようにしているようだ。

キルトショップのオーナーと顧客は、ほとんどが女性である。キルトショップは、女性による女性のための手芸専門店にすぎない。とは言え、複数の店舗があるショップ、有限会社や株式会社のショップもある。

不思議なことに、すべての都道府県に専門店があるのは、さまざまな手芸の中でもキルトだけである。キルトショップは手芸ビジネスとして見過ごせない存在なのだ。



18頁写真に写っている女性のキルトショップ。このオーナーがデザインした布も販売されている